

2020 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」候補者の選考経過と選考結果

2020 年 12 月 21 日

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。本年度は 16 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 7 名を授賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に各自、講評を書いていただきましたので、あわせてそちらもご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 岡隆

受賞者（応募順）

清水佑輔 (しみず ゆうほ)	「あなたが抱く高齢者への差別的態度は、あなたの将来に悪影響をもたらす」 —ステレオタイプ・エンボディメント理論を活用した差別的態度の軽減—	東京大学大学院 修士課程 1 年
中越みずき (なかごし みずき)	システム正当化理論の観点から低所得層の政治参加 を捉える	関西学院大学大学院 博士課程前期課程 2 年
謝新宇 (しゃ しんう)	愛着不安が身体的攻撃につながるプロセスの解明：DV のエスカレート法則の観点から	広島大学大学院 博士課程前期 2 年
前田楓 (まえだ かえで)	直観的な協力は集団の枠を超えられるか：最小条件集団パラダイムを用いた検討	安田女子大学大学院 博士後期課程 2 年
矢澤順根 (やざわ あやね)	対人関係におけるクリティカルシンキングの役割モデルの提案と検討	広島大学大学院 博士課程後期 1 年
柏原宗一郎 (かしはら そういちろう)	受け入れ拒否はなぜ生じるのか？：Zero-Sum の観点からの検討	関西学院大学大学院 博士課程前期課程 1 年
水野景子 (みずの けいこ)	罰がなぜ協力を阻害するのか？：社会的ジレンマにおける罰による意思決定変容の検討	関西学院大学大学院 博士課程前期課程 2 年

## [選考経過]

### 1) 募集

5月30日に、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。締め切りは例年通り9月30日とした。

### 2) 選考委員選出と第一次審査

応募総数16件につき、第一次審査を行った。選考委員は、理事から2名、一般会員から2名を推薦し、下記の4氏について会長と常任理事会の承認を得た。

#### 選考委員（敬称略）

理事より： 小川一美（愛知淑徳大学）、渡邊芳之（帯広畜産大学）

一般会員より： 沼崎誠（東京都立大学）、林直保子（関西大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、選考委員はお互いに匿名としたうえで、個別に各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与することで行った。なお、A評価は5本以内とした。

### 3) 第二次審査

第一次審査結果に対して、A評価は40点、B評価は10点、C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。メール審議の結果、コロナウイルス感染拡大に伴って多くの研究者の研究の実施・継続が困難になっている現状のなかで、ひとりでも多くの若手研究者を支援したいという考えから、得点の高い順に上位7名を授賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

## 2020年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評

### 小川一美先生(愛知淑徳大学)

今年度の特徴の一つは、オンラインによるデータ収集を計画された研究の増加だったと思います。オンラインによるデータ収集と対面によるデータ収集の比率を、昨年度（総応募数27件）と今年度（総応募数16件）で比較してみました。オンライン：2019年度14.8%→2020年度50.0%，対面：2019年度70.4%→2020年度25.0%，オンラインと対面の併用：2019年度0%→2020年度12.5%，不明：2019年度0.0%→2020年度12.5%。COVID-19終息の兆しが見えない状況で応募書類を作成されたわけですから、対面による

データ収集をあきらめた方が増えたのでしょうか。しかしそれだけでなく、トレンドとしてオンラインによるデータ収集に社会心理学研究がシフトしつつあるということでもあるのでしょうか。多様なサンプルを求めてオンラインを活用するという研究も見られました。Zoomを活用して実験を行うといった研究計画などは、劣った環境下でもなんとか適切なデータ収集を目指そうとされる姿勢の現れのように思いました。その一方で、実験室実験の方が望ましいと思われる研究計画もやはり有り、多方法によるデータ収集は一連の研究の妥当性検証にもなるはずですから、COVID-19が終息したらデータの収集方法を変えて再度実験をされることを期待してしまいます。制約なく、思う存分、ベストだと考える方法でデータが収集できる日が早く戻ってくることを願ってやみません。

#### 渡邊芳之先生(帯広畜産大学)

昨年に続いて若手研究者奨励賞の審査に携わらせていただきました。昨年と同様に、応募された研究計画はいずれも明確な意義と目標を持ち、実行可能性の高いもので、その中から一部を選考するのは難しい作業でした。

審査を通じて印象に残ったのは、若い先生方の興味や研究テーマに、現実の社会的問題と直接関連したソーシャルなものが多かったことです。奨励賞を受賞した7件の中にも、高齢者への差別、低所得層の政治参加、外国人移民の受け入れ拒否など、現実の社会的問題と直結する研究テーマがいくつも含まれています。歴史的に見ればこうした研究こそ「社会心理学」なのですが、そうした研究が多くなっていることは、私のように「社会的認知の内的過程」のような比較的ミクロな研究テーマが流行していた時代に学生生活を送った世代から見れば、隔日の感があります。こうした研究が発展し、そこから得られた知識が社会にフィードバックされて、社会的問題の解決や改善につながっていくことを強く期待します。

なお今回の審査では、新型コロナウイルス感染拡大に伴い研究活動に困難を生じている若手研究者が多いという認識から、可能な限り多くの研究計画に奨励賞を授与するという方針で審査を行い、それを理事会にも認めていただきました。これからの学会の機能について議論が高まる中で、研究者の支援についての本学会の考えが示されたのはよいことだったと思います。

#### 沼崎誠先生(東京都立大学)

昨年度に引き続き、若手研究者奨励賞の審査にたずさわることになりました。今年度はコロナウイルスの影響か昨年度に比べ応募件数が少なかったようです。コロナウイルス影響下の中で参加者との対面での研究がしづらい中でどのように研究を進めていくかについて多くの申請者の方が工夫されていたように思いました。審査者としても参考になる研究方法についての情報をいただけ、ありがたく思いました。今年度も申請書のレベルは全体的に高いという印象を受けました。しかし、昨年度に比べ実証可能性について疑問を持た

ざる得ない研究がいくつか見受けられました。昨年度の講評で書いたことと逆のことを書くようですが、現実の社会や人間にとってどのような意義のある研究かが明確となっていて非常に魅力的な研究目標が書かれている一方で、実証研究の部分になると十分に練られておらず、その研究で得られる実証データが、その大きな研究目標と関連してどのような意義を持っているのかが明確ではないように感じられる研究が散見しました。制限のある研究環境の中で研究をすることは大変なことです、データを得る前に、得られるデータがどのような意味を持ちうるのかをきちんと考えた上で研究を進めていただければと思います。最後に、今回採択されなかった研究においても、非常に有意義で面白い研究もあったと思います。採択されなかった場合でも、研究を実施して、次の研究へと続けていかれることを期待しています。

#### 林直保子先生(関西大学)

昨年度に引き続き、若手研究者奨励賞の審査を担当させていただきました。昨年に比べると応募件数がやや少なめで、厳しい社会状況の中、皆さん苦勞されているのだろうと感じました。さて、昨年度の講評で、以下のように書かせていただきました。「申請する側としてはどうしても限られた紙面の中に「大きな夢」を掲げたくりますが、1件に与えられる研究費が10万円という本賞の性質を考慮して、研究の長期的・究極的なゴールと同時に、今回の助成金で実現される短期的な成果がある程度具体的に想定できるかどうかを意識して審査しました。」その意図をくみ取っていただいた影響もあるのかと思いますが、今年度の申請書は研究のスコープがクリアなものが多い印象を持ちました。少ない紙面の中で、工夫して研究の目的や方法を提示していただき、大変刺激を受けました。審査委員会では、コロナ禍の厳しい状況の中で少しでも若手の皆さんを支援したいということで、今回の選考結果となりました。わたくしも今でこそ、実験が難しい環境ならば、少し手を止めてアイデアを練ってみようか、という気持ちにもなりますが、30年前の若手の時であったなら、焦りまくってさぞ大変な精神状態になっていたのではと思います。若手の皆さんには、このような時こそ、柔軟な発想と工夫でなんとか乗り越えてほしいと思いました。

以上